

## NFRJ18 質的調査の対象と思想

○松木洋人（大阪市立大学）

本報告の目的は、NFRJ18 質的調査（第4回全国家族調査質的調査）の調査対象がどのようなプロセスのなかで定まったのかを報告するとともに、そのプロセスのなかで浮かび上がってきた本調査を支える基本的な思想の輪郭を示すことにある（cf. 渡辺 2001）。

NFRJ18 質的調査は、NFRJ18（質問紙調査）の回答者から協力を募った対象者に「家族をめぐる生活史」を聴き取ることから始まり、その後、一部の対象者の家族について、観察を中心とするフィールドワークを実施するという2つの段階からなる。これはいくつかの意味で、日本の社会学における通常の質的調査とは異なる調査プロセスである。第1に、日本の社会学においては、混合研究法はスタンダードになっておらず、量的データと質的データが併用される場合においても、しばしば質的調査は「予備調査」と呼ばれて、量的調査を設計するための準備作業という補助的な位置づけを与えられるにとどまる。ましてや、NFRJのような大規模な全国調査において、量的データと質的データの双方を体系的に収集して、分析のために活用しようとする試みは希少である。第2に、量的データと質的データの双方が活用される場合においても、Creswell and Plano Clark（2007=2010）の分類では「探究的デザイン」に該当するような、第1段階の質的調査で得られたデータから発見された仮説の妥当性を、第2段階の量的調査を通じて検証するという設計がなされることが多いと思われる。これに対して、NFRJ 質的調査は、量的調査が行われた後に、そして、そこから得られた量的データの分析はまだ行われていない時点で実施される。この特徴は、量的データの分析によって検証されるべき仮説の発見にも、また、Creswell and Plano Clark（2007=2010）が「説明的デザイン」と呼ぶ研究で行われるような、量的データの分析結果の質的調査による説明にも還元されない位置づけを、その計画時点から本調査に要請する。この点とも関連して、第3に、多くの質的調査は、相対的に限定された調査対象への個人的な関心から出発し、調査が進行するなかで、調査者の関心の変容することでリサーチ・クエスチョンが洗練されたり、それに伴って、調査対象の範囲や調査対象者の経験のどの側面に注目するかが修正されたりする。しかし、本調査においては、多様な研究関心をもつ30名強の会員が1つのチームを組んで質的調査を実施するという条件のもとで、かなり範囲の広いリサーチ・クエスチョンを設定したうえで、調査対象者の“条件”をあらかじめ設定した後は、それらを修正することなく、インタビュー調査によるデータ収集を継続して完結させるという計画が導かれることになった。

それでは、上述のような意味で特徴的なプロセスをたどる本調査は、どのように調査対象を設定して、実際にどのような人々からインタビュー調査への協力を得るに至ったのか。NFRJ18 のいわゆる「サテライト調査」であるという特異な条件のもとで、したがって、通常の質的調査では経験することのないかたちで、調査対象の設定に向けて試行錯誤するなかで、本調査が家族および社会調査についての以下のような認識に立脚するということが浮かび上がってきた。すなわち、①量的データが豊富に入手できるタイプの家族は統計的分析に委ねて、そうでないタイプの家族は質的調査が担当するという分業は前提としない。言い換えれば、“多様な家族”への接近および質問紙調査との対話・連携が重要である一方で、“標準的な”家族生活を対象としても発揮されうるような質的調査の固有の意義には追求する価値がある。②依存者に対するケアの授受は、それに関わる者の家族生活を大きく特徴づける。③家族生活における経験と実践を理解するための質的データは、インタビュー調査で得られる“語り”に限定されるべきではなく、自然に生起する相互行為の観察や録画データも重要な選択肢である。

### 参考文献

- Creswell, John W. and Plano Clark, Vicki L., 2007, *Designing and Conducting Mixed Methods Research*, Sage（大谷順子訳、2010, 『人間科学のための混合研究法——質的・量的アプローチをつなぐ研究デザイン』北大路書房）。
- 渡辺秀樹, 2001, 「NFR98 の思想」嶋崎尚子編『家族と職業』日本家族社会学会全国家族調査委員会, 79-88.

キーワード：全国家族調査、質的調査、量的調査